

残り40日。その5

「善人なおもって往生をとぐ、いわんや悪人をや」

『歎異抄』(たんにしょう)は、鎌倉時代後期に書かれた日本の仏教書である。作者は、親鸞に師事した河和田の唯円とされる。書名は、その内容が親鸞滅後に浄土真宗の教団内に湧き上がった異義・異端を嘆いたものである。

第一条では、阿弥陀仏はすべての人々を救うという本願を立てているが、ただ他力の信心(平生に阿弥陀仏の本願(=真実の仏教)を聞く一念の瞬間に阿弥陀仏より頂く、弥陀の本願に微塵の疑いもなくなった心)が要である。念仏者(=阿弥陀仏より他力の信心を頂いた計り知れない御恩に、お礼の言葉として念仏を称えずにいられなくなった者)は肉体がいつ死んでも極楽往生間違いない身になっているから、極楽往生のためにする善はもはや不要であり、また如何なる悪を犯しても極楽往生の妨げにはならないと説かれている。逆説といっても過言ではない内容である。

なぜなら、善人は様々な功德をもって世に貢献したのだから、往生を遂げるのであるゆえに、ましてや、功德など及びもつかぬ悪行三昧をしでかした悪人ならなおさら持って往生を遂げるのは当たり前だというのである。

つまりは、阿弥陀仏にすがれば何もしなくとも往生を遂げるのであるから、日々の功德など必要ないといっているのと同じなのである。

その真意はいかに。平一小の後ろの坂道を朝上りながら考えていると、突然、理解することができた。

つまりは、阿弥陀仏の力は偉大であり、功德を上げるか上げないかなどという価値観で往生が決定することではないというのだろう。もっと、大きな力が我々に働いているのであり、その力にすがるといふ心こそが、往生への道の一本道だということである。言い換えれば、往生への道は、論功行賞などという小さなものではないということだ。

翻って、往生への道を、大学への道と言い換えたなら、どんなことが考えられるだろうか。

大学への道も、毎日の努力のたまものではないということになったら、学生は勉強することがおろそかになるのではないかという疑念も生まれる。

しかし、これだけ勉強したから、こんなに努力したからというその見返りで大学への道が開かれるのかといわれたら、少し違ふと私は考える。

往生への道の大きなベクトルとして、「阿弥陀仏の力にすがるといふところが肝要なのだ。つまり、大学への道の大きなベクトルとして、「磐城高校の力の中にいることを大切にすること」がよいえるところとしたら、この力こそが、人々を救う道になるのだと考える。

もう一度翻って、それでは、磐城高校という学校は、その言葉に耐えうる学校たり得ているか。そこが、いま、一番大切なところである。